東方～夢限録～

黒詩鳥ver0.95

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方～夢限録～

【Ｎコード】
Ｎ２１８８Ｎ

【作者名】
黒詩鳥ｖｅｒ０．９５

【あらすじ】
夢忘塔の主こと望月　夢美は、溢れでてしまった夢を回収するため幻想郷へと赴く
夢美は無事に夢を回収することができるのだろうか！？
更新がかなり鈍いですが作者は完結させる気まんまんです！！

夢と夢美と幻想郷（前書き）

この作品の一部に上海アリス幻樂団様の作品である東方Ｐｒｏｊｅｃｔのキャラ及び設定などを使っております
ありませんと思いますが、ご意見などがあります場合は、間違っても上海アリス幻樂団様の方へご意見などを送らないようにお願いいたします

この物語の題名を東方～夢限録～としていますが、この小説は作者の二次創作なので
本家の上海アリス幻樂団様では、このような題名のゲームは今のところ発売しておりませんので間違わないようにお願いいたします。
（当たり前のことすいません）

また、キャラの性格などは、作者の妄想が大半を補いますので、気分などを害した場合は申し訳ありません。

夢と夢美と幻想郷

人類は２１世紀に夢を見ていた時代があった
だが、その希望も最早、幻想のものになろうとしていた
このままでは、そう遠くない未来に外の夢（きぼう）は尽きてしまうだろう
そうなってしまう前に何としてでも夢を再び与えなくては・・・
ここは外の世界と幻想郷の狭間にある、夢忘郷（むぼうきょう）
そんな、夢忘郷の中でもひときわ目立つモノがある――――　「夢忘塔（とう）」
まるで神話の世界のバベルの塔のような佇まいである
その塔の主である、望月　夢美は、深い溜め息を吐いた
「困ったわね・・・このままでは夢のバランスを保てないわ」
望月　夢美は、真剣に困っていた。
彼女が夢忘塔を管理してかれこれ２００年ぐらいが経つがこのような問題が発生するようなことはなかった
その問題は、夢の流出である
元来この塔の役割は、外の世界で忘れ去られた夢を塔に貯め置き再び外の世界に還すのが役割である
だが、外の世界で忘れ去られる夢の数が多すぎて塔の貯蓄機能がパンクしてしまったのである
幸い、すべての流出は防ぐことは出来たが一部の夢は本来忘れ去られたものが行く場所に流れだしてしまった――――幻想郷である
このままでは、外の世界の夢の量を調整することができなくなってしまう
「仕方ないわね、これも私の監督不行き届きが招いた結果ね・・・」
そんなことを言いながら、ただでさえ暗い部屋がさらに暗くなるような溜め息を吐いた
望月　夢美の仕事は大きく分けて３つになる

1、夢の貯蓄及び夢の管理
2、あるべき場所に夢を戻す
3、夢の回収

「グズグズ考えてたって解決しないわ、私は私の仕事をするとしますか！」
さっきの重苦しい空気はどこに行ったのやら、一転してまるで遊びにいく子供のような明るい顔をしていた
望月　夢美という人物は最初から物事を深く考えないのである
それが彼女の短所でもあり長所でもある
ある時は、夢を還しすぎてバブルなるものを起こしてしまったこともある
だが、それでも彼女はいつでも仕事熱心なのである
「しかし、外に出るのも２００年ぶりくらいかな～♪」
彼女は内心とても楽しみだった、なんせ２００年ぶりの外である
幻想郷へと行く彼女はとても夢で満ちていた

こうして望月　夢美は幻想郷に着いた

序章～終～

夢と夢美と幻想郷（後書き）

え～と、どうでしたでしょうか？
自分、このような連載物書くの初めてなんですよね＾＾；
ここは、もっとこうしたらいいかなとか意見くださると作者が感激いたしますのでどうかこれからもよろしくお願い致しますｍ（＿）ｍ

霧と夢美とチルノ（前書き）

前書きって苦手なんですよね・・・
何を書けばいいんでしょうね？
とりあえずこの小説は、あまり戦いませんというか今のところ戦う予定がありません（嘘）
自分、元々はほのぼの系を書くのが得意なのでシリアスとか書くの苦手なのでね・・・
あと、あまり少女たちに戦ってほしくない←ここ重要

霧と夢美とチルノ

その日は、朝から湖に霧が濃く出ていた
だが、妖精には霧が濃いだろうが薄いだろうがそんなものはお構いなしである

「なんか面白いものはないかな～・・・」

さっきから、湖の端を来り行ったりしているが人影一つ見えないのである
それもそのはずである、ただでさえ人が近づかないというのに、この霧である
そんな霧の中、やっとのことで見つけた人(おもちゃ)を、この妖精が見逃すはずもなかった

「誰か見つけたわ！やっと、面白そうになってきたわ♪」

見つけるが早いか、その妖精は、人影の元へと飛んでいった

時は遡ること半刻ほど前、望月　夢美は無事に幻想郷へとたどり着くことが出来ていた

「さて、無事についたわね、・・・ところでここはどこかしら」

見渡す限りの霧・霧・霧である
ただでさえ、ここ一帯の地理を知らない彼女である
此処に住んでる者でも、こんな日は外を歩きたくないだろう
そんな霧にもお構いなしなのが、この望月　夢美である

「悩んでても霧も晴れないし、歩いていればそのうちどこかに着くわよね」

それから、歩くこと半刻
夢美は盛大に迷っていた

「困ったわ、まさか幻想郷に来ていきなり道に迷うなんて・・・」

「おい、そこの人間！」

「・・・？、私のことかしら、しかし声はすれど姿は見えず・・・」

「上よ、上！」

「上？・・・ぉわ！」

夢美が上を向くとそこには、氷の羽に青い髪、青い目おまけに青い服を纏った少女がいるのである

「なかなか、青づくしね・・・」

「・・・？　あんた、ところで、一体そんなところで何してるの？

「う～ん・・・散歩？」

「いや、アタイに聞かないでよ」

「まぁ、それはいいじゃない、ところであなたは誰？」

「アタイはチルノ、この幻想郷さいきょーとは、アタイのことを言う！」

自信満々に、殆どない胸を精一杯に後ろに反らせて言っているのを見ていると

「アタイが答えたんだからアンタも言いなさいよ」

「私は、望月　夢美、夢美って呼んでくれたらいいわ」

「夢美ね、わかったわ。ところで、あんまり見かけない顔だけど人里の人？」

「違うわ、私は夢忘郷から来たの」

「むぼうきょう？」

「簡単にいうと、幻想郷の隣の世界から来た感じかな」

「というと、外の人間？」

「まぁ、そんな感じね、正確には外と幻想郷の境にあるの」

夢美もさすがにずっと上を向いて話していると首が疲れてきたので

「チルノ、そろそろ首が痛いから話すなら降りてきてくれない？」

夢美がそう言うと、チルノはゆっくりと夢美の前に降りてきた

空に飛んでいるときはわからなかったが

かなり小さい、私も自分はかなり小さいと思っていたが、自分がほ

んの少し勝っていることに心の隅で小さく喜んでいると

「ところで、夢美は幻想郷に何をしに来たの？」

「仕事よ、仕事」

「仕事？」

夢美は少しばつが悪そうな顔をしながら

「・・・そう、私が失敗しちゃったから、その失敗を取り戻すためここに来たの」

「ふ～ん、そうなんだ・・・まぁ、誰だって失敗はあるよ」

あっけらかんと一切、曇のない顔で言われると夢美も次第に元気が出てきた

「そうね、チルノの言うとおりだわ、こんなところでウジウジしていたって、何も解決しないものね！」

さすがに初対面の彼女に言うのは、恥ずかしくて言えなかったが、私は、さっきまで仕事を少し諦めかけていた

初めて来た幻想郷で、いきなり迷ってしまい、自分のあまりの不甲斐なさに気持ちが折れそうな時に、今、目の前に居る明るさと元気の塊のような少女が現れた

最初は少しびっくりしたが、彼女と話していると少しずつ元気が出てきた

もし、私がチルノと出会ってなかったら、目的も果たせぬまま夢忘郷にもどっていただろう

「チルノ、ありがとうね！」

「は、・・・ぇ？、アタイなにかしたっけ？」

「別に？ところで、チルノ、ここらへんにたくさん人が住んでるとこないかしら？」

「人だけじゃないけど、たくさん住んでるとこなら知ってるよ」

「私一人じゃそこに行けそうじゃないから、チルノに案内頼んでいい？」

「いいわよ、さいきょーのアタイに任せておきなさい！」

「ふふ、心強いわね」

こうして、私は、しばらくの間、この小さな少女チルノと一緒に幻想郷を旅することになった

一章　～終～

霧と夢美とチルノ（後書き）

え～と、どうでしたでしょうか？
誤字とかありましたらドシドシコメントくださいm（__）m
あと、応援的なものしていただけると作者、独りでに舞い上がります
では、また会いましょう＾＾ノシ

館と夢美と門番（前書き）

どうも、こんにちわ
え～とこのような小説、目を通していただき誠にありがとうございます
現在この小説は非常に内容が平和です
バトルとか期待しちゃいかんよ
そのうち、主人公のプロフィール的なものだそうかなとか思っています
こんな前書き読んで頂いてありがとうございました

館と夢美と門番

ここは、霧の湖に存在する西洋風の館
普通の館と違う点を上げるなら、見た目が真っ紅(まっか)であることと
ここの主が吸血鬼あることぐらいだ
そんな館の一室で、この館の主ことレミリア・スカーレットとその
隣にはメイド服を着た女性が、レミリアに付き添うように居た

「・・・・・・」

「お嬢様どうかしましたか？」

「問題ではないけど、誰かが来るわ」

「では、美鈴に追い払うように言っておきましょうか？」

「別に言わなくても、結果はともかく彼女は仕事をするわ」

咲夜はまだ不安が拭いされないのか、少し不安な顔をしながら

「でも、もしもの事があったら・・・」

「あら、そのためにあなたが居るんじゃないの？」

「もちろんそのとおりです」

咲夜はそのとおりだと言わんばかりに自信を持って答えた

「それに、私もちょうど暇をしていたし暇つぶしくらいにはなるで

しょう」

レミリアは不敵な笑みをしながら部屋を出て行った

そんなこともつゆ知らず、望月　夢美とチルノは霧の湖の湖畔を歩いていた

「たまには歩くのもいいもんね♪」

「私は飛べる方がいいなぁと思うけどな～」

湖の真ん中を飛んでいけばすぐつくらしいが残念ながら私は空を飛びことなんてできないので、こうやって遠回りをして目的の場所を目指していた

「ねぇ、チルノ結構歩いたけど、まだ、そのなんだっけ、こうまかん？って言うのは見えないの？」

「う～ん、もうちょっとだと思うんだけどな・・・アタイも歩いて行ったことないからあんまりわからないんだよね～」

「そうなんだ、やっぱりいつもは飛んでいくの？」

「うん、大体は飛んで行くわね」

「飛ぶのって、やっぱり気持ちいい？」

チルノは少し考えた顔をすると

「う～ん、飛ぶっていうのが普通すぎてわからないわ」
「そっか～、私も一度でいいから空を飛んでみたいな・・・」
「大丈夫よ、努力すれば必ず願いは叶うって誰かが言ってたわ」
「そうね、夢は失わなければいつか叶うわね」
そんなことを言っていると、目的の場所が見えてきた
「夢美、紅魔館が見えてきたよ」
「あれが、こうまかん？」
夢美も我が目を一瞬疑った
世の中にはいろいろな形や色の建物はたくさんあるだろう
形はいたって普通なのであるだがその色はまるで、血に染まってるかのごとく紅かった
「あ、めーりんだ！」
チルノは知り合いでも見つけたのか急いで走って行ってしまった
「・・・青の次は赤って、ここは極端な色しか無いのかしら」
「夢美～、どうしたの？そんなとこで突っ立て」
「へ、別に何も無いわ、少しボーとしていただけよ」

「ねぇねぇ、めーりん、門通してくれない？」
夢美が急いでいくと、そこには大きな門が立ちふさがっていた
そして門番を務めているらしい女性が一人、門の前に立ちふさがっていた
「それは出来ませんね、私はここの門を守るようにお嬢様から言い付かっておりますから」
「ねぇ、めーりん初めて合う相手がいるからってそんな嘘つかなくてもいいよ？」
「な、チルノな、何を言ってるのかな～♪・・・」
美鈴と呼ばれた女性は、こちらと目を合わせないように明後日の方向を見てそんなことを言っているのである
誰から見ても嘘はバレバレである
「あの～、こんにちわ。私、望月　夢美と言います」
「へ、ぁ、丁寧にどうも、私はこの紅魔館の門番をしている紅　美鈴といいます」
「突然来てすいませんが、門を通してもらえませんか？」
「すいません、お嬢様から許可を得ていないのでここを通すことはできません」
さっきの少しふざけた態度からは考えられないような、しっかりとした意志が感じ取られた

「（きっとのこの人も、私と似て少し抜けているとこもあるかもしれないが責任をもっている人だ）」

「もう、めーりんのケチ！少しぐらい見逃してくれてもいいじゃない！」

「チルノ、そんなこと言っちゃだめだよ。美鈴さんだって意地悪で言ってるんじゃないんだから」

「折角、来ていただいたのに申し訳ありません。ですが、私もこれが仕事ですので」

「そんな、こちらこそいきなり来てしまったので迷惑をかけてすいませんでした」

そんなことを私は言いながらも内心は少し残念だった
もしかしたら、ここに夢（きぼう）があるかもしれない
それに、このおかしな館には、どのような人達が住んでるのかも知りたかった
もしかしたら、チルノみたいに友達になれたのかもしれない・・・

「美鈴、あなたもたまにはしっかりと仕事をするのね」

「さ、咲夜さん見てたんですか！？」

咲夜と呼ばれた人はどこかの屋敷に仕えている人のようにメイド服で着ていた。
髪は綺麗な銀色をしていた、声は少し怖くなるように言っているのかもしれないが、彼女の目はとても優しかった

「見ていたわけじゃないわ、見えたのよ」

「それを見ていたって言うんじゃ・・・」

「文句あるの？」

「いえ、別にありません！」

「あなたがいつもこれぐらい真面目に仕事をしていたらもう少しは、あの白黒の侵入も防げるんじゃないかしらね？」

「も、申し訳ありません・・・」

「まぁ、それはいいわ。そこの方」

「へ、わ、私ですか？」

「えぇ、そうです。お嬢様がお呼びしていますので、私が屋敷の中を案内させてもらいます。私についてきてください」

「あの、チルノも一緒でいいですか？」

「お嬢様は客人をすべて通していいといったので別に構いません」

「ほら、チルノ一緒に行こう」

「やった！初めてこの屋敷の中には入るわ！何か面白いものあるかな！」

「美鈴、私が見てなくてもしっかりと仕事をしなさいよ」

「任せてください、蟻の1匹も通しませんよ」

咲夜は少し笑いながら

「足元、1匹蟻が通ってるわよ。まぁ、頑張ってね」

こうして私とチルノは無事に紅魔館に入ることが出来た
できれば、いつか美鈴とは、じっくりと話をしてみたい
屋敷に入る前に私がに見た美鈴の姿は、一生懸命、蟻を追い出してる姿だった

館と夢美と門番（後書き）

え～と、どうでしたでしょうか？
少しでも楽しんでいただけたのなら幸いです
次回もいつもどおり小説中に１回は少し主人公の気分が暗くなってしまったりしますが、きっと周りの人？達が支えてくれるでしょう
これからも、１週間に１本は最低のペースで投稿していきたいと思います

最後にこの作品を読んでくださったあなたに最大限の感謝を捧げます

吸血鬼と夢美とメイド（前書き）

こんばんわ＾＾初めての人は初めまして＾＾
前にも読んで頂き再び来てくださった方ありがとうございますm（
＿＿）m
この小説の作者の黒詩鳥と申します＾＾
今回はこのような小説を見ていただきありがとうございます＾＾
最後まで楽しんでもらえれば嬉しいです
では、どうぞ

吸血鬼と夢美とメイド

紅魔館―――それは人ならざる者たちが住む館である

こんな館に今日は珍しくも客が来ていた

望月　夢美とチルノである

「へ～、中も真っ赤なんですね～」

夢美は物珍しそうにキョロキョロと辺りを見ていると

「迷わないようについて来てくださいね」

そう言うのはこの紅魔館の唯一の人間でありメイド長を務めている

十六夜　咲夜である

「あ、はい、すいません・・・」

夢美は再び緊張するとしっかりとはぐれないように咲夜についていく

「（なんか私この娘に会ってから謝られてばっかの気がするわ・・・）」

咲夜が少しそのことについて考えていると

「あの・・・」

「ん、なにかしら？」

「あなたのことなんて呼んだらいいですか？」

「あぁ、そういえば教えてなかったわね。十六夜咲夜よ、咲夜って呼んで頂戴」

「はい♪、私は望月　夢美といいます、夢美と呼んでください」

「えぇ、わかったわ」

夢美も少しは気が緩んだのかさっきまでと違いどこか楽しそうにしていると

「着きましたよ、お嬢様が中で待ってにいますので」

咲夜はそう言うとどこかに行こうとした

「咲夜さん、どこかに行くのですか？」

「えぇ、せっかくのお客様なのだからお茶の用意をしなくてはいけませんからね♪」

咲夜はそう言うと次の瞬間には消えていた

「あ、あれ・・・消えちゃった・・・」

先程まで目の前に居た彼女が瞬きをする間もないうちに消えてしまったので夢美はしばらく呆けていると

「・・・あっと、いけないいけない待たせているんだった」

夢美は約束もしていないのに待たせているのも少しおかしなものだと思ったがあまり気にしないことにした

夢美が扉を開けると、そこにはただ薄暗いだけの部屋が広がっていたただでさえ窓の少ない館であるのにカーテンまで閉めきっているせいかおおよそ昼とは思えない暗さだった

「・・・あれ、部屋間違えたのかな？」

夢美が部屋を出ていこうとすると

「別に間違えていないわよ」

部屋の奥から声が聞こえてきたかと思うとその瞬間、両壁の燭台に一斉に明かりが灯った

「ようこそ紅魔館へ、私はここの館の主のレミリア・スカーレットよ」

夢美は突然のことにいきなり現れここの館の主と言っている背中から蝙蝠のような羽の生えた少女を呆然と見ていることしかできなかった

「まったく、最近の人間は挨拶の一つもロクにできないのかしら？」

「へ・・・あ、わた、わたしゅ・・・」

「ちょっと、そんなに慌てなくてもいいから落ち着いて頂戴」

夢美は落ち着いて深呼吸をすると

「初めまして、私は望月　夢美といいます。夢美って呼んでください」

「そう、夢美って言うのね。わかったわ」

「あの・・・失礼ですが、なんで私を館の中に入れてくれたのですか？」

レミリアは少し考えるふりをすると

「暇だったからよ」

まるで何もたいしたことでもないかのようにそう言い放った

「そ、そうですか。でも、館に入れてもらえてありがとうございます♪」

「別に大したことではないわ、それよりも立ち話も何だから隣でお茶でも飲みながら話しましょ」

レミリアはそう言うと後ろの扉を開けた

「ほら、どうしたの？そんなとこでボーとしていても疲れるだけよ」

「あ、はい」

夢美は少し小走りで付いて行くと扉の先にはさっきまでの暗い部屋

とは違い自然の柔らかな光の入ってくるテラスが広がっていた
夢美はしばらくそのテラスから広がる景色に感動していると
「早くしないとお茶が冷めてしまうわよ？」
「すいません少し景色に見とれていて」
「別に珍しい景色でもないでしょ？」
「そうなんですか？私こんな景色を見るのは初めてで」
「あら、そうなの？まぁいいわ、ゆっくりお茶でも飲みながら話しましょ」
夢美が席に着くと先程まで案内をしてくれていた咲夜さんがそこに居た
「無事にお嬢様に会うことが出来たみたいですね」
「どうも先程はありがとうございました」
「いえ、どういたしまして」
「あら、咲夜が素直にお礼を受け取るなんて珍しいわね」
「そ、そんなことありませんよ！」
咲夜は顔を真っ赤にしながらあーだこーだと反論しているのをレミリアはクスクスと笑いながら聞いていると

「もういいです！私は仕事に戻りますので御用がありましたらいつでも呼んでください」

咲夜はそう言うとまだ少し顔を赤くしながらそそくさとどこかへと行ってしまった

「ふふふ、咲夜はどうもあなたのことを気に入ったみたいよ」

「え、そうなんですか？」

「ええ、普段の彼女なら、主の命令に従っただけですとか言ってるわ」

「そ、そうなんですか・・・ところで咲夜さんって怖いんですか？」

レミリアは少し考えると

「えぇ、怖いわ」

「や、やっぱり怖いのですか・・・」

レミリアは期待通りの反応で面白いのか少し笑うと

「でもね、彼女は自分の大切なもの達にはとても優しいわ」

レミリアは楽しそうにそう言うと

「さぁ、咲夜の話は終わり。今度はあなたの話を聞かして頂戴」

「私の話ですか！？」

レミリアは少しいたずらな笑顔を浮かべると

「そう、私はあなたに興味があるから館に招き入れたのよ？」

さも当然のように言うのである

「最初に言っておきますけどそんなに面白い話はないですからね」

「えぇ、別に構わないわ」

夢美はあれからお日様が半分くらい沈む時間まで話し続けた世間一般では夕方という時間だ

「わかったわ、要するに仕事でドジった夢美はこの幻想郷のお隣のなんだっけ？」

「夢忘郷ね」

「そう、その夢忘郷から来たのね」

「う～ん、まぁそんな感じかな」

レミリアは突然思い出したかのように顔を上げると

「あ、そうだ夢美に聞かなきゃと思って聞いたなかったことがあったの」

「うん？何？」

「あなたと一緒に館に入ってきた氷精がいたでしょ？」

「チルノのこと？」

「そうよ。でさ、あなたと会った時からいなかったけどチルノどこに行ったの？」

「・・・・・・・」

「夢美、あなた完全にチルノのこと忘れてたでしょ？」

夢美は少し考えると

「あ、あの時はその・・・とても緊張してて余裕がなかったのよ！」

夢美は手をブンブン振り回しながら一生懸命言い訳をしながらも恥ずかしさでみるみる顔が赤くなっていく

「あ～、もうわかったわ。ほっておいても面倒だし一緒に探しましょう」

夢美はレミリアの手をがっしりと掴むと

「ありがとうレミリア♪」

こんなに真正面からはっきりとお礼を言われたことがなかったので少し照れながら

「別にいいわよ、それと私のことはレミィって呼んでくれて構わないわ」

「レミィね、レミリアって呼ぶよりも親しい感じがするね♪」

「そうね、その名前で呼ぶのは一部の友達だけよ」

「じゃあ、今日から私たちも友達だね♪」

レミリアは少し恥ずかしそうにしながら

「そうね、友達よ」

「さて、レミィどこから探す？」

なにぶんこの広い館である。どこから手をつければいいのか検討がつかない

「こういう時は、咲夜を頼るに限りわ。咲夜～咲夜～～」

「お嬢様お呼びでしょうか？」

レミリアが呼んだと思ったら次の瞬間には咲夜が目の前に現れていた

「えぇ、夢美と一緒に来たチルノがどうもこの館で迷子になってる

らしいわ」

「わかりました、私が探しますのでお嬢様たちはゆっくりしていてください」

「そ、そんなの悪いですよ、私も一緒にさがします」

「夢美一人でこの館をウロウロしたら今度は夢美が迷子になってしまうわ。だから、私も一緒についていくわ」

咲夜は降参したと言わんばかりに溜息をつくと

「わかりました、お嬢様たちはしらみ潰しに部屋を見ていってください。私は地下の倉庫などを見てきますので見つけたらすぐにそちらに向かうので」

咲夜は要件を言うとまたどこかへと消えてしまった

「さて、私たちもゆっくりと探していくとしようかしら」

夜が近づいたきたせいか昼間に廊下を歩いた時とはまた全然違う感じがする廊下を二人で歩いていると

「ねぇ、レミィひとつ聞いてもいい？」

「えぇ、答えられることなら答えるわ」

「レミィが人間じゃないのは見てわかるんだけど、じゃあレミィはなんのなの？」

「あれ？言ってなかったかしら？私は吸血鬼よ」

「吸血鬼って、あの血を吸う吸血鬼のこと？」

「えぇ、そうよだからこの館には窓が殆ど無いでしょ？」

「そういえば、ほとんど窓がないね」

「吸血鬼は太陽の光に当たると灰になってしまうわ、だからあれは出来る限り光が入らないようにするためよ」

夢美がレミリアから吸血鬼について聞いていると、どこからともなく咲夜が現れ

「お嬢様、チルノが見つかりました」

「あら、ずいぶん早いのね。で、どこに居たの？」

「氷精だから涼しいところにいるだろうと思って冗談半分で冷蔵庫の中を探してみるといいました」

「れいぞうこ？・・・あぁ、この前買ったあの箱ね」

「あのそれで、チルノはどうしたんですか？」

「大変気持よさそうに寝てたので部屋に寝かしてきました」

「そうなんですか～、咲夜さんありがとうございます♪」

夢美はあとでチルノに謝っておかないといけないなと思った

「ねぇ、夢美、今日はもう遅いし泊まっていくでしょ？」

「え、そんなの悪いよ」

「別にいいわよ、部屋もたくさん余っているし食事なら咲夜がつくってくれるわ。ねぇ、咲夜」

「えぇ、もちろん腕によりをかけて作りますよ」

「ね、だから泊まっていきなさい。それにあなたの連れのチルノだって寝てるんだから」

「レミィがそこまで言うのだったら泊まっていかせてもらうね」

～吸血鬼の夜はまだまだ続く～

吸血鬼と夢美とメイド（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました
作中に誤字などがきっとあると思いますが・・・作者は探すのがとても苦手なので見つけたら教えてもらえると嬉しいです
生意気ですが感想やこうしたらいいよとかアドバイスなどいただけると作者は心が嬉しくなります
次の更新は一応今のところ1週間後を想定してますが遅れてしまったらすいません
いい話が頭の中でできると3日以内に更新しているかもしれませんが・・・
今回読んでくださった方がまた訪れてくださると私もとても励みになります
これからもよろしくお願いします

最後にこの作品を読んでくださったあなたに最大限の感謝を捧げます

魔法使いと夢美と紅魔館（前書き）

どうもお久しぶりです^^;
作者の黒詩鳥です
ちょっと前に短編も書きましたが連載のこの速度は書いてる本人としても遅すぎる・・・と思います^^;
さすがに1ヶ月越す前に投稿しようと思って気づいたら3日前・・・ギリギリセーフですよね？
私としましてはこの物語の紅魔館編は上・中・下の三部構成で書くつもりだったので次で多分・・・紅魔館編は終了になると思います
それではどうか楽しんでいってください！！

魔法使いと夢美と紅魔館

今日の紅魔館はいつもと違い賑やかだった

今日はいつもと違い客が来ていた

その喧噪は夜を迎えようとする今も衰えを知らなかった

「夢美、あなたに一つだけ言っておかなければいけないことがあるわ」

「ん、なにレミィ？」

そんなふうに話をしているのは、この館の主ことレミリア・スカーレットと望月（もちづき）　夢美（ゆめみ）である

「絶対に地下にだけはいっちゃだめよ」

「地下に何かあるの？」

レミリアがどう答えればいいか困った顔をしていると

「うん、わかった。地下には近づかないよ」

夢美は少しレミリアの態度に疑問を持ったが詮索はしないことにした

「そう・・・助かるわ」

レミリアも安心したのか元の顔に戻った

「あ、そういえば夢美、食事の時にこの館に住んでる私の友人を紹介するわ」

「他にも住んでる人がいたんですか？」

夢美が少し驚いた顔をしていると

「まぁ、ほとんどこっちの方には来ないわね」

「こっちの方？」

夢美が疑問に思い首を傾げていると

「えぇ、彼女はほとんど図書館に篭っているわ」

「・・・ずっと図書館に篭ってて身体に悪くないの？」

夢美がどこか心配げな顔をしながら尋ねると

レミリアは少し苦笑いをしながら答えた

「そうね・・・少し身体は弱いかしら」

二人がそんな風に他愛もない話をしていると

「お嬢様、お食事の準備ができました」

咲夜さんが目の前にどこからともなく現れた

「わかったわ、ついでにパチェも呼んできてくれるかしら」

「わかりました」

咲夜は返事をするとまた目の前から魔法のように消え去った

「ねぇ、レミィさっきから聞きたかったことがあるんだけどいい？」

「えぇ、私が答えられることなら答えるわ」

「咲夜さんって魔法使い？」

「咲夜は魔法使いなんかじゃないわ、そうね言うなら能力者ね」

「能力者？」

夢美は聞きなれない単語に首を傾げると

「私たち人外の者は生まれた時から大なり小なり何か力を持っているわ。そして能力者って言うのはそんな人外の力を持った人間のことよ」

夢美はレミリアの説明をゆっくりと理解していくとこう答えた

「要するに普通とは違う力を持っているのね」

「まぁ、簡単に言うとそんなとこね」

「夢美、広間に着いたわよ。」

レミリアはそう言うと目の前の大きな扉をやすやすと開けた
目の前に広がるのは大きなテーブルと色とりどりの料理
「わぁ～」
夢美が本日何度目になるのかわからない感嘆の声を上げていると
「早くしないと折角の料理が冷めてしまうわよ」
そういうが早いかレミリアは既に席についていた
夢美もあとを追って席に座ると
「しかし、色んな料理がありますね～」
「そうね、咲夜も今日はいつもよりも気合を入れて作ったみたいね。いつもより1．5倍は量があるわね」
そんなふうに話をしていると
自分たちが入ってきた扉とはまた違う方の扉が開いて
紫色の髪をした少女が入ってきた
一目見て普通の人間ではないと思った
目の前の相手が宙に浮いて移動してきたらどんな人でも普通の人じゃないとわかるだろう

その少女は入ってくるなり

「レミィ、今研究中で私忙しんだけど・・・」

そう言いながら紫の髪をした少女はやっと本から顔を上げると夢美と顔が合った

「・・・・あなた誰？」

「へ、あ・・・私は望月　夢美っていいます。夢美って呼んでください」

「そう・・・私はパチュリー・ノーレッジよ。パチュリーって呼んでくれて構わないわ」

パチュリーは、そう言うと再び本へと顔を下ろした

「自己紹介も済んだし、私は戻るわね・・・」

そういうとパチュリーは再び来た道を戻ろうとする

「ちょ、ちょっとパチェ折角来たんだから夕食ぐらい一緒に食べましょうよ」

「冗談よ、冗談。折角ここまで来たんだから食事くらいしていくわよ。それに面白そうな話を聞けそうだし」

パチュリーはそう言うと夢美の方を見た

「お嬢様お待たせしました」

また唐突に咲夜がどこからともなく現れた

「ワインのほうを持ってきました」

そう言って咲夜はワインを開けるとグラスへと注いだ

「では、私は片付けがありますので・・・」

咲夜がまたどこかに行こうとすると

「咲夜、今日ぐらいは他のメイドたちに任せて一緒に食べましょ」

レミリアはそう言うと咲夜に席を勧めた

「全員が揃うのなんていつぶりかしらね・・・」

レミリアが感慨深そうにそう言うと

「三日ぶりね」

パチュリーが冷徹にバッサリと切り捨てた

「・・・・・・」

レミリアは少し沈黙すると

「さぁ、乾杯しましょ！！」

久々にこんな賑やかな食事をした

あっちに居るときはいつも一人だったから

今日の食事は全く違うものに感じられた

勢いでワインを飲んでしまったが、私お酒に弱かったんだ・・・

夢美の意識は賑やかな喧騒の中、静かに暗闇へと沈んでいった

～賑やかな夜は未だ収まるとこを知らず～

魔法使いと夢美と紅魔館（後書き）

どうでしたか？
少しでも楽しんでいただけましたか？
誤字脱字等ありましたら教えていただけると嬉しいです^^
書き終えた後、冒頭の文の関係性が全くに近いほどなくなったので（どっちかというと下の冒頭に当たる文でした）書き換えたのですが・・・あまりしっくりとこない感じが^^；
最初は食事中の会話などの書こうかなと思ったのですがあまりにも長くなりそうというか収集が付かなくなりそうなのでカットしました^^；
次の話は2週間以内に投稿したいなとか思っていますができなかったらすいません
最後に読んでいただいたあなたに、最大限の感謝を捧げます

夢美と妹と姉（前書き）

どうもこんばんわ黒詩鳥です
なんか昨日の余韻が残ってたせいか次の話1日で描き上げてしまった
そして今回やたら長くなった気がするが・・・きっと気のせいです
よね～
そして予想以上にシリアスみたいになってしまった・・・
今回8：2・・・9：1ぐらいでシリアスが勝っています
というかあれをシリアスと言っていいのかわかりませんが＾＾；
これでなんとか長かった1日も終わります（物語の中の話ですよ）
キャラ崩壊はしていないと思いますがキャラの性格は作者の一存に
よって決めていますので気に入らなかったりしたらすいません＾＾；
では、ゆっくり楽しんでいってください！！

夢美と妹と姉

はぁ～、つまんないな～・・・・・・」

暗いジメっとした部屋で少女が一人そうつぶやいた

そんなとき不意に部屋の扉が開き

誰かが入ってきた

「魔理沙？・・・・・・誰？」

話は遡ること少し前

「う、う～ん・・・・・・あれ、ここどこだろ？」

夢美が目を覚ましたのは見たこともない部屋だった

ここが自分の部屋でないことはすぐに分かった

部屋の装飾から調度類にいたるまで素朴なつくりだが歴史を感じさせていた

「あ、そうか・・・私寝ちゃったんだ・・・」

夢美はまだ意識がはっきりしないのかどこか上の空だった

「・・・トイレ行こう」

疲れのせいかお酒のせいかわからないが重い体を上げて
夢美は誰に告げるわけでもなく場所すらわからないトイレへと旅立った
～数分後～
さすがに目も覚めてきたのか夢美も自分の周りの異常に気がついた
暗いのは夜だし吸血鬼が主の館なのだから仕方ないだろと思っていた
それにしても明かりが一つもないこの状況は異常と言わずになんだろうか
気づいたときは引き返すにも来た道すらもわからず
夢美はただただこの闇い（くらい）廊下を歩いていた
「う～・・・完璧に道に迷った・・・というか廊下に迷った」
夢美がふらふらとあっちらこっちらを彷徨っていると
少し行ったとこの扉の隙間らしきところからわずかだが光が漏れていた
「あ、誰かいるのかな」
夢美はこれで助かったと思った
この館に住んでいる者ならば帰り道を教えてもらえるだろうと思った

こうして話は現在へと戻る

夢美が開いた扉の先は到底誰かが住むような環境ではなかった

壁の所々はヒビが入り

洞窟のようにジメッとしていた

そして明かりらしき明かりといえば2本の燭台ぐらいである

そんなふうに夢美が部屋を見回していると

「魔理沙？・・・・・・誰？」

不意にどこからか声をかけられた

声しか聞こえないはずなのにその声は明確な畏怖を夢美へと与えた

「・・・・・・誰もいないの？」

夢美はその恐怖を必死に押し付け未だ見ぬに声の主に向かって問いかけた

「誰かいるの？」

その夢美の質問に声の主は声では答えず行動で答えた

ぼんやりとした蝋燭の火に照らされて闇の奥から出てきたのは

一人の少女だった

この眼の前の少女が普通の少女ではないことがすぐに分かった

ぱっと見た目はこの館の主であることレミリアとさして違いはないように思えた

違う点を上げるとすれば髪の色と羽である

金色の髪に樹の枝に宝石をぶら下げたような特徴のある羽

「あなた誰？」

目の前の少女は私に警戒してるのかこちらをジッと見てきた

「私？私は望月　夢美だよ。夢美って呼んでね」

「・・・そう、夢美って言うんだ」

少し警戒を解いてくれたのか

先程まで感じていた視線が無くなった

夢美が少しほっとすると

「ねぇ、私今とても退屈なんだ・・・遊ぼ」

その言葉を聞いた瞬間夢美は蛇に睨まれた蛙のごとく動けなくなった

「あ、遊ぶ？何して遊ぶの？」

夢美がそう聞くとその少女は少し笑うと

「そうね・・・弾幕勝負なんてどうかしら？」

「・・・だんまくしょうぶ？」

こちらの質問が聞こえないのかそれとも聞く気が無いのか分からないが

少女がまとっていた空気が一気に変わった

「久々の遊び道具なんだから簡単に壊れないでね♪」

少女はそう言うとなにかカードみたいなものを取り出し宙へと掲げようとした

「フラン！！やめなさい！！」

どこからともなく怒気をはらんだ声が飛んできた

夢美はゆっくり声の下ほうを向くと

そこには先程まで一緒に食事や話をしていたレミリアが居た

「夢美、大丈夫？」

夢美は今までの緊張が一気に切れたのか

へなへなと座り込んでしまった

「な、なんとか大丈夫だよ・・・」

「だからあれほど地下には近づいちゃダメって言ったのに」

レミリアは心配そうに夢美にそういうと

再びあの少女へと向き直った

「あら、お姉さま。お姉さまが此処に来るなんて珍しい」

少女はさっきまでと違って明確な殺意とも恨みとも言えない空気をまとっていた

「そうね、私もあなたが大人しくしているならここには来ないでしょうね」

レミリアはそんな空気も気にせず目の前の少女に冷淡に言い放った

「ねぇ、レミィ・・・お姉さまって・・・」

「えぇ、そうよ彼女は私の妹よ」

姉妹であるはずの目の前の二人の雰囲気は到底姉妹のものとは思えずまるで親の敵のような雰囲気だった

そんな険悪な雰囲気のはずなのに二人共どこか悲しそうだった

「そ、そうなんだ・・・ねぇ名前はなんていうの？」

「私？私はフランドール・スカーレットよ、皆はフランとか妹様とか呼んでいるわ」

「そう、フランて言うんだ・・・」

「夢美、上に戻るわよ」

レミリアはそう言うと強引に夢美の腕をつかんで引っ張ていこうとする

「ちょ、ちょっと待って！」

夢美はそう言うとレミリアの腕を振り払ってフランの前へと戻った

「ね、ねぇ・・・」

「なに？」

「私と友達になろうよ・・・」

夢美はそう言うとフランに向かって手を差し出した

「何この手？」

「う～ん・・・友達の証？」

フランは夢美の手をまじまじと見つめると

「ねぇ、本当に私と友達になってくれるの？」

「もちろんだよ！」
夢美の返事を聞くとフランは怖ず怖ずと手をさし出してしっかりと
夢美の手を握った
「よろしくね！フラン♪」
「よろしくね、夢美」
その様子をじっと見ていたレミリアは
「さぁ、夢美それで満足かしら？上に行きましょ」
「ねぇ、フランも一緒に上に行かない？」
夢美が何気なくそう言うと
「ダメよ」
この闇い（くらい）地下の部屋にレミリアの感情のこもらない一言
がひときわ響いた
「な、なんで？上に行って話をするぐらい―」
「絶対にダメよ！」
レミリアは固い決意を秘めた目をしていた
その決意がどのようなものか夢美には分かるすべもないが

夢美はどうしても納得することができなかった

「それなら私はここに残るわ」

レミリアにも夢美の意思は伝わったのか

さらに毅然とした態度で望んできた

「それもダメよ。夢美あなたには私と一緒に上まで来てもらうわ」

「なんで？私なら大丈夫、一人で上まで戻れるわ」

レミリアは何か言い難いことを隠すように

「そんな問題じゃないの・・・ただ」

「ただ？」

今まで沈黙を守ってきたが姉の無様な姿に呆れたのか

「いつものようにはっきりと言えばいいじゃないお姉さま。この部屋を封印するから夢美には出ていって欲しいって」

「封印・・・？」

夢美は理解ができなかった・・・いやしようとしなかった

一体何を封じ込めるためにこの部屋を封印するのか

そしてなぜ今日この日に再び封印するのか

考えればとても簡単なことだ

フランをこの部屋と共に封印するのだ

そして今までのも封印していたのだろうがその封印を私が解いてしまったのだ

「・・・私のせい？」

「夢美、あなたのせいなんかじゃないわ。これは運命なのよ」

レミリアは今にも泣き出しそうな感情を必死に抑え夢美に言った

「さぁ、夢美わかったでしょ・・・だから一緒に上に行こう」

「レミィ、どうしても私を連れていきたいなら今から言う質問に正直に答えて」

「・・・わかったわ、でも私が答えたら上に行ってもらうわよ」

レミリアにはどんな質問が来ようと返す自信があった

それにここで折れてしまっては、今までしてきたことを全て否定することになってしまう

「レミィは本当にこの部屋ごとフランを封印したいの？」

「へ・・・」

レミリアはあまりの予想外の質問におどろいてしまった
その質問はレミリアにとって一番簡単な質問であった
今まで何度も何度も自分に言い聞かせてきた答えをただ言うだけでよかった
「えぇ、もちろん」
レミリアは今までで一番自信を持って答えられたと思った
「レミィ、それは嘘ね」
「な・・・夢美！何を根拠に嘘って言うの！？」
「だって、レミィ泣いてるじゃない」
「え・・・」
レミリアは指摘されて初めて自分が涙を流していることに気づいた
「レミィ・・・本当のことを答えて」
「えぇ、何度でも答えるわ。この部屋とフランは封印するわ」
「本当にそれで後悔はないの？」
「後悔など無いわ」

この答えは真っ赤なウソ

後悔など今まで嫌というほどしてきた

でも・・・私は後悔しようとフランに嫌われようと自分がやっていることが間違ったことなんて思わないわ

「そう・・・わかったわ。レミィ約束どうり私は上に戻る」

「・・・ありがとう」

レミリアはそう言うと部屋の外に出ていった

「ごめんね、フラン・・・」

「別に夢美が謝ることじゃないわ。いつものことよ」

こうして私はこの部屋に別れを告げた

そして再びこの部屋は闇の中へと帰っていった

「レミィ、最後もう一度聞くわ。後悔はない？」

「・・・くどいわね。私の答えは変わらないわ」

「そう・・・じゃあ私は先に上に行ってるね」

「道分かるの？」

「これだけ明るかったらいくらなんでも上への行き方ぐらい分かる

よ」

「・・・そう」

いつも封印するときは辛いが今日はいつもよりも辛い気がする

夢美の変な質問のせいかしら

それとも私が夢美に嘘を付いたから？

「・・・・・夢美待って」

気づいたら私は夢美を引き止めていた

「なに？」

「一つだけあなたに謝らなければいけないのことがあるの」

私は深く息を吸い込んで言った

「後悔してないなんて嘘、本当はとても後悔しているの・・・」

「そう・・・ありがとうね本当のことを言ってくれて」

「ねぇ夢美、今度は私から質問してもいいかしら」

「なに？」

「あなたは大切な人を守るためならばどんなひどい事でもする？」

「う～ん・・・私には無理かな、私にそんなことをやる勇気なんて無いもの」

「勇気ね・・・」

レミリアはどこか自嘲したように笑うと

再び扉を封印しようとする

「大切な人を身を持って守ることも勇気がいると思うけど、たまにはその勇気をその大切な人を信頼することに向けてみたらどうかな？」

「信頼？」

「そうよ、その人が大切なようにきっと大切な人もその人の事がとても大切なはずよ。その人を悲しませたくないはず」

「・・・もう無理よ、何百年とこの薄暗い部屋にとじこめてきたのよ！あの子はきっと私を恨んでいるわ」

「レミィ、思いはね相手に伝えなくちゃ意味が無いものなの自分の心に閉じ込めてたらその思いは伝わらないわ」

「そう・・・ね」

レミリアは何かを決意すると

「夢美、封印に手間取りそうだから先に部屋に戻って寝ていて頂戴」

「えぇ、そうするわ。なんか眠くなってきちゃったしね」
夢美はそう言うと上に上がる階段を目指して歩いて行った
夢美が再び後ろを振り向いたときはレミリアは再び
あの闇い（くらい）部屋の中へと入っていくところだった――
「・・・まずいわ、また道に迷った」
夢美はまたもや道に迷っていた
「ここどこよ～、階段も一向に見えないし・・・」
夢美が半分自暴自棄になりながら叫んでいると
目の前からゆらゆらと火の玉がこちらに迫ってきた
「ゆ、幽霊・・・？」
夢美は必死に隠れるとこを探すが一本道の廊下に隠れるとこなんか
存在するはずもなく
幽霊？は着実に夢美へと近づいてくる
「あの～、どうかしましたか？」
「はうっ！・・・な、何だ咲夜さんじゃないですか・・・驚かさな
いでくださいよ」

「驚かせてしまいましたか、それはすいません」
「いえいえ、謝らないでください」
「そうですか？」
「ところで咲夜さんはこんなところで何をしているんですか？」
「あぁ、寝る前の屋敷の点検ですよ」
「そうなんですか大変なんですね、しかし助かりました～」
「何かあったのですか？」
「いや～、また道に迷ってしまって・・・すいませんが上にはどこからいけます？」
「あぁ、それなら私が案内しますのでついてきてください」
「わかりました」
「夢美さん、お嬢様をお見かけしませんでしたか？」
「レミィは・・・見てないですね。でもレミィならきっと大丈夫ですよ」
「はぁ？」
咲夜は夢美が何を言いたいのかわからない顔をしていたが

夢美はきっと今日の夜の出来事は誰にも言わない方がいいと思っていた

～こうして長い吸血鬼の夜は朝を迎えた～

夢美と妹と姉（後書き）

・・・やっぱり長い気がするいつもよりは
そして色々詰めすぎたか・・・？
いや、待て今回の物語は一つのことが書きたかっただけなので詰め込みすぎはないはずだ
最後まで読んでくれた人ありがとうございます＾＾
誤字脱字等がありましたらどうか指摘のほどをしてもらえますと嬉しいです
またこんな物語ですが感想などをもらえると嬉しいです
感想もらった方のとこにはこちらからも訪問すると思いますのでよろしくお願いします＾＾
最後に読んでくださったあなたに最大限の感謝を捧げます

～幕間劇～幻想と現実が入り交じる喫茶店（前書き）

（注）この話は全く本編とは関係がありません。少々キャラが崩壊しておりますのでショックのあまり倒れてしまいそうな方はご遠慮ください

紅魔館編も一段落しましたしあるのかわからない反省と雑談そして無いくせにあるように必死に探す制作の裏話？を登場キャラクターと共にグダグダになりつつ話していきたいと思います

重要なことなのでもう一度言います
この話は一切本編に関係がありません
読まなくても本編には支障が出ませんので死ぬほど暇かしかたないからお前の駄文読んでやろうという方だけでＯＫです

では、始まり始まり

～幕間劇～幻想と現実が入り交じる喫茶店

黒詩鳥
「どうもこんにちわ～、作者の黒詩鳥（こくしちょう）です」

夢美
「主人公の夢美（ゆめみ）です！」

黒詩鳥
「いや～しかしここまで来るのに長かった・・・」

夢美
「いや・・・長かったってまだ6話ぐらいしか書いてないですよね？」

黒詩鳥
「うっさい！！俺には長かったんだよ！」

夢美
「それはアンタに文才がないからじゃないの？」

黒詩鳥
「黙らっしゃい！こんな小説書いて投稿するのが初の試みなんだから仕方ないだろ」

夢美
「そりゃ友人がやってるから俺もやろうとか言ってやったからストックもないの当たり前じゃない」

黒詩鳥
「さて、そう言えばここは喫茶店らしいから何か一応注文しといてやるかな・・・」

夢美
「あたし、ホットミルク～♪」

黒詩鳥
「じゃあ俺は麦茶」

黒詩鳥
「お前・・・ホットミルクってお子様か？」

夢美
「うるさいわね！アンタこそ喫茶店で麦茶って何よ（笑）」

黒詩鳥
「っは、これだからお子様は」

夢美
「お子様お子様ってうっさいわね、これでも一応２００年以上は生きてるんだからね！」

黒詩鳥
「じゃあ、ババアか？」

夢美
「・・・・・・グスン」

黒詩鳥

「ちょ、泣くなよ・・・ごめんごめん」

夢美
「さ～て、馬鹿なことはこのくらいにしておいて」

黒詩鳥
「そうそう、今回は俺たち二人だけじゃなくて色々なヤツらに来てもらってるからな」

夢美
「みんな私の友人よ～♪」

黒詩鳥
「最初の一人に入ってきてもらおうかな」

夢美
「チルノ～入ってきていいよ～」

チルノ
「全くいつまで待たせるのよ・・・」

夢美
「ごめんね、代わりに好きなもの頼んでいいよ～♪」

チルノ
「う～んと・・・じゃあアタイはカキ氷！！」

黒詩鳥
「あるかな・・・カキ氷」

チルノ
「アンタ誰？」

黒詩鳥
「俺？俺は作者の黒詩鳥ですよ～よろしくね～」

チルノ
「ねぇねぇ夢美、こいつ誰？」

夢美
「一言で言うならバカかな～」

黒詩鳥
「人が折角紹介したのに無視しないでください。それと俺は馬鹿じゃない！！ちょっと残念な子だ！」

夢美
「バカより意味がひどくなってることに気づかないほどバカなのね」

黒詩鳥
「まぁ、バカと何か紙一重っていうし」

夢美
「アホかしら？」

黒詩鳥
「酷い・・・酷過ぎる・・・」

夢美
「ほら、へこたれてないで話を進行させなさいよ」

黒詩鳥
「はいはい・・・チルノ～」

チルノ
「ふぁふぃ？」

黒詩鳥
「しゃべるときは口の中のもの飲み込んでからにしようか？」

～氷精カキ氷咀嚼中～

チルノ
「で、なに？」

黒詩鳥
「夢美に初めて会ったときの感想は？」

チルノ
「なんか、頭の緩そうな子だな～って思ったわね」

夢美
「・・・」

黒詩鳥
「よかったな、チルノのお墨付きで頭緩いってさ」

夢美
「・・・いくら考えても否定出来ないのが腹立つわ」

黒詩鳥
「夢美はチルノのことどう思ったんだ？」

夢美
「青い」

チルノ
「・・・」

黒詩鳥
「青い・・・ねぇ、確かに青いな」

夢美
「まぁ、冗談は置いといて元気な子だな～って思ったかな」

チルノ
「ふふん、アタイは元気がとりえなのよ！」

黒詩鳥
「確かに元気だな・・・妖精ってしんどくなることとかあるのか？」

チルノ
「そうね・・・生きてる以上は身体的にしんどくなるけど、それはあくまで疲労のせいよ」

黒詩鳥
「じゃあ、病気とかにはならないのか？」

チルノ
「妖精が病気になるってことは自然が病気になってるのと同じなの

よ」

（注）作者の勝手な見解なので信じこまないでください

黒詩鳥
「そうなんだ～」

夢美
「さて、そろそろ次の人も呼ばなきゃね」

黒詩鳥
「おぉ、そういえばそうだった」

夢美
「完全に忘れてたでしょ？」

黒詩鳥
「ソンナコトハナイデスヨ」

夢美
「・・・まぁいいわ」

黒詩鳥
「次は～・・・めんどくさいから紅魔館の住人全員カモ～ン」

レミリア
「いつまで待たせるのよ・・・」

フラン
「夢美～来たよ～♪」

咲夜
「全く人を呼んでおいてこんなに待たせるなんて」

パチュリー
「あら、意外に早かったわね」

夢美
「いらっしゃ～い」

黒詩鳥
「・・・門番の姿が見当たりませんね」

咲夜
「門番なので当然留守番していますわ」

黒詩鳥
「さいですか」

夢美
「しかし、話の中と違って二人共仲がいいんだね♪」

レミリア
「もちろんよ、私のたった一人の妹よ」

フラン
「私も別に最初からお姉さまを嫌ってなんかないわ」

黒詩鳥
「仲よき事は美しき哉」

フラン・レミリア
「誰？」

黒詩鳥
「どうもこの物語の作者の黒詩鳥です。よろしくね～」

フラン
「よろしくね～」

レミリア
「ふ～ん、作者ね～」

黒詩鳥
「パチュリーも挨拶ぐらいわ・・・」

パチュリー
「よろしくね、あと本読んでるから邪魔しないでくれるかしら」

黒詩鳥
「あいあい、ゆっくり読んでくれ」

夢美
「あれ？咲夜さんは？」

レミリア
「あぁ、咲夜ならさっき紅茶を淹れに行ったわよ」

黒詩鳥
「頼めば出てくるのに・・・」

レミリア
「で、呼んだからには重要な話でもあるの？」

黒詩鳥
「いや、全く雑談するだけ」

夢美
「今回は和やかに行くんだよ～」

レミリア
「そうなの」

フラン
「本編であまりお話できなかったから、いっぱい喋るよ～」

夢美
「私も色々フランに聞きたいこととかもあるしね」

黒詩鳥
「さて、質問に今ならもれなく無料（ただ）で答えるよ」

レミリア
「夢美をください」

黒詩鳥
「それは質問じゃなくてお願いね。駄目ですあげれません」

フラン
「案外ケチなのね」

黒詩鳥
「あげたら話が進まなくなるでしょ！」

レミリア
「それならずっと紅魔館にいるといいわ」

黒詩鳥
「だから話が――――」

レミリア
「アンタには聞いてないわよ」

フラン
「そうよ、これだけ広いんだら夢美がずっといても問題じゃないわ」

夢美
「やっぱり無理かな・・・仕事もあるしそれに他の色々な人とも触れ合いたいから」

レミリア
「そう・・・それなら仕方ないわね」

フラン
「夢美ならいつでも歓迎だから宿にでも困ったら来てね」

夢美
「ありがとうね、二人共」

黒詩鳥

「俺を無視するなぁ～」

夢美
「折角いい雰囲気なのになんでぶち壊すわけ？」

レミリア
「空気の読めない男ね」

フラン
「最低ね」

黒詩鳥
「酷い言われようだ・・・」

黒詩鳥
「もっと作者をいたわれや！！」

夢美・レミリア・フラン
「嫌！」

黒詩鳥
「そんなにきっぱり言わなくても・・・」

夢美
「そんな甘やかしたら、また1ヶ月近く更新しなくなるでしょ」

黒詩鳥
「あの時は話のネタに困ってたんだよ」

夢美

「本当に？」

黒詩鳥
「これは本当だ。お前があまりに無力なせいでどうやってフランに絡ませるか相当悩んだ」

フラン
「私、本編にあまり出てこなかったよね・・・」

黒詩鳥
「うぐ・・・」

レミリア
「そうね、どちらかというと完全に私がメインになってたわね」

黒詩鳥
「これでも本気で構想に1週間以上掛けたんだぞ！」

レミリア
「そうなの～、ふ～ん」

黒詩鳥
「あ、信じてないな！」

夢美
「信じる要素がないからね」

黒詩鳥
「もういいよ・・・信じなくても」

レミリア
「案外傷つきやすいのね」

黒詩鳥
「いや、全然」

夢美
「しかし、えらく長くなってきたね・・・これ」

黒詩鳥
「そうだな・・・次の話までの繋ぎに書いたはずなのにえらく長くなったな」

黒詩鳥
「まぁ、この物語もオチはほぼ考えてあるし最後までは書けるだろ」

夢美
「今回のは？」

黒詩鳥
「オチなぞ無い！！」

黒詩鳥
「ということで、こんな駄文に付き合ってくださった方ありがとうございました」

夢美
「こいつも頑張って次話書いていますのでどうか書き上げた時はよろしくお願いします」

黒詩鳥
「えらく唐突に終わりを迎えた気もするが」

夢美
「きっと尺の問題ね」

黒詩鳥
「こんな感じで物語の一区切りごとにこれからも書いていきたいと思います」

作者＆amp;登場人物
「これからもどうかよろしくお願いします！！」

～幕間劇～幻想と現実が入り交じる喫茶店（後書き）

こんな後書きみたいな後に後書きとか・・・
何書けばいいんだろうね・・・
とりあえず・・・これからもよろしくお願いします！！
最後にこの作品を読んでくださったあなたに最大限の感謝を送ります

紅魔館と夢美とさよなら（前書き）

こんにちわ作者の黒詩鳥です＾＾

さて書き終わったのが午前４時半です書き始めたのが午後４時頃です

なぜ半日もかかったんでしょうね？

なんとか紅魔館編終了です！！

こんな感じでいいんでしょうかね？

とりあえずゆっくりしていってください！！

紅魔館と夢美とさよなら

賑やかな夜は終わり

静かな朝がやってきた

朝というものは忙しい者と暇な者が明確に分かれる

「あぁ、忙しい忙しい」

今日も今日とて紅魔館のメイド長は忙しく動き回っていた

いくら優秀なメイド長と言えど体はひとつである

出来る仕事にはも限界がある

「ちょっと夢美さん。起きてくださいよ!!」

そうメイド長がいつもより忙しい原因の一端はこいつ

「うぅん・・・あと30分・・・」

なかなか要求する時間の長い奴である

「夢美さん!!それもう3回目ですよ!!」

さすがはメイド長

3回も起こしに来るとは律儀である

「・・・わかりました～起きます！・・・ＺＺＺ」

「・・・はぁ」

さすがのメイド長も溜息である

「わかりました・・・そのうち起きてきてくださいね」

「ふぁい～・・・ＺＺＺ」

そう言って夢美は再び布団を深くかぶった―――

「咲夜、夢美は？」

この館の主であるレミリア・スカーレットはどこか諦めた感じで聞いた

「安らかに眠っています」

「まさか、あれほど寝るとわね～」

さすがのレミリアも呆れ気味だった

「ねぇねぇお姉さま、夢美はまだ起きないの？」

今まで後ろにいたのかレミリアの後ろからひょこっと顔を出すフラン

そうメイド長こと咲夜の忙しい原因の２つ目がこの妹である

昨日まで地下で幽閉されていたというのに

今朝起きたら姉と妹で仲良く寝てるではないか

いったい何が起こったのかわからない咲夜だったが

主であるレミリアに聞いても

「別にいいじゃない」と全く理由がわからないふりをしたが

一つだけ確かなことがある

やはり仕事が増える

咲夜曰く

やっと二人共素直になってくれたのはうれしいことですがが疲れます、らしい

こうして少し変化のあった紅魔館の一日が始まった――――

「・・・・・・・ふぁ～～・・・よく寝た～♪」

久々にゆっくり寝たな～とか思いながら

夢美はまだ恋しいベッドがから這いずり出てきた

とりあえず起きたら挨拶かなとか思いながら

夢美は服を着替え

廊下へと出てきた

「さ～て・・・どこ行けばいいんだろ？」

見渡す限り廊下と無数の部屋

さすがに昨日のことがあったせいか

夢美も無闇に歩いては迷うということを知ったらしい

「・・・どうしようかな」

１０秒ぐらい考えたが良い答えが出なかったのか

夢美はどこかへと向かって歩き出した

「まぁ家の中だしそのうちどこかの部屋に着くに決まってるよね？」

夢美は少し不安を感じながら誰もいない空間に向かって質問口調でそういった――

当たってほしくない時に限って勘というものは当たるものである

「やばい・・・また迷った？」

そう夢美はまた迷っていた

運が悪いのか相当の方向音痴なのかそれともこの館に悪魔でも住んでいるのか

答えは全部だろう

正確に言うと住んでいるのは吸血鬼だが

「・・・なんでいつも地下に行き着くのかな？」
夢美は昨日見たであろう地下へと再び迷い込んでいた
「私階段なんて降りたかな？」
フラフラと地下を彷徨っていると
前から誰かが来ているではないか
「助かった～これでこの迷宮（地下）からも抜ける」
夢美は少し小走りでその人影？の元へと向かった
「・・・チルノ？」
そこに居たのは咲夜でもレミリアでもフランでも無く
チルノだった
「あ、夢美じゃない！！」
「こんなところで何してるの？」
「探検ね！！」
「チルノ、レミィがいる場所わかる？」
チルノは自信満々と言った感じで胸を反らして答えた

「もっちろん！！」

夢美は一応助かったと安堵した

「じゃあさ、連れていってよ♪」

「この天才のアタイに任せなさい！！」

チルノはそう言うと何の迷いもなくズンズンと進んでいった――――

あれから結構な時間が経ったが

夢美とチルノは今だに迷宮（ちか）を探検（まよう）していた

「ねぇチルノ、出口まだ？」

さすがのチルノも自信がなくなってきたのか

「・・・もう少し？」

「疑問で返さないでよ・・・」

さすがの二人も元気がなくなってきていた

そんな二人に救いとも言えるような人影が見えた

「チルノ！前から誰か来るわ！」

「え、本当？」

前から来る人影もこっちを見つけたのか

少し小走り・・・訂正　小飛びで来てくれた

「全く捜しましたよ」

咲夜が少し呆れ気味でため息を吐いた

「え？捜していてくれたんですか？」

夢美は驚きを隠せない様子で咲夜に聞いた

「えぇ、お嬢様が夢美さんが迷ってる予感がするというので」

「レミィの予感ってすごいんですね」

「まぁお嬢様はそういう能力なので」

そう言いながら咲夜は二人を案内しながら階段を上がっていった―

――

夢美達が付いたのは昨日、夕食を食べた大広間だった

昨日あった大きなテーブルは退けられ

代わりにお茶とかをするには丁度良さそうなテーブルと椅子のセットが置かれていた

その椅子にレミリアが座っていた

だが、あの大きなテーブルよりもこの部屋には変わったところがあった

昨日まであれほど仲が悪そうだった

レミリアとフランが笑いながら話をしていた

少しの間、夢美はその光景を見てポカンとしたが

笑顔になると二人の元へと行った

「おはよう！！二人とも♪」

「夢美、おはようよりもこんにちわの方が近い時間帯になってるわよ」

「おはよう～♪」

二人が仲良く挨拶をしてくれたのが嬉しいのか夢美はついつい顔がにやけてしまった

「「・・・夢美、顔が気持ち悪いわ」」

「二人共、酷い！！」

「皆、アタイのこと忘れてない？」

そう言いながらチルノが夢美の後ろからひょこっと顔を出した

「あら、居たの？」

レミリアが冗談なのか本気なのかわからない口調で答えた

「夢美は覚えてくれてるわよね？」

「もちろんよ！！」

夢美は元気にそう答えた

「元気に答えながら目を逸らすのやめてくれない？」

チルノは頬をぷっくりと膨らましながらに抗議していた

「嘘よ、嘘。しっかり覚えているわよ！！」

「本当？」

「本当よ」

チルノも機嫌を直してくれたのかさっきまでぷっくりと膨れていた頬が元へと戻っていた

「ねぇねぇ夢美、昨日ゆっくりできなかったからお話しようよ」

フランがテーブルから身を乗り出しながら待ちきれないとばかりに言ってきた

「えぇ、ゆっくりと話しましょう」

それからしばらくの間４人で他愛もない話をした――――

「さてと、そろそろ行かなきゃね」

夢美はそう言うと椅子から立ち上がった

「あれ？夢美どこかに行っちゃうの？」

フランが行ってほしくないという感じで聞いてきた

「えぇ、私も仕事しなくちゃ」

「仕事？」

「そう、皆が忘れたものを探さなきゃいけないの」

「そうなんだ・・・」

フランは残念そうに顔をうつむかせながら答えた

「そうだ！フランにおまじないしてあげるわ」

夢美はそう言うとポケットから青いリボンを取り出し

フランの髪へと結びつけた

「これなに？」

「私とフランがまた会えるようにするおまじない」

「本当にまた会える？」

「えぇ、きっと会えるわ」

夢美は何処かすまなさそうな顔をしながら答えた

「そう、じゃあまたね♪」

「うん、またねフラン。レミィも元気でね・・・」

「えぇ、またあなたが来るのを楽しみにしているわ」

そう言うと夢美は扉から出て行こうとした

「夢美」

「なに？レミィ」

「私が紅魔館の主である間はいつでも歓迎するわ」

そう言うとレミリアは再び紅茶に口をつけた

「えぇそうね、もう1回くらいは咲夜さんのお茶が飲みたいしね」

そう言うと夢美は今度は振り返ること無く大広間を出て行った――

「玄関までお送りします」

「あ、咲夜さんありがとうございます」

そう言うと咲夜は玄関に向かって歩き出した

「あの・・・」

「なんですか？」

「色々と迷惑をかけましたがありがとうございました！！」

咲夜は少しキョトンとすると

「ふふ、別に構いませんよ。慣れていますし」

「そうですか？」

「えぇ・・・さて、玄関に着きましたよ」

大きな扉からはよく晴れた幻想郷の空が見えた

「それでは、咲夜さん本当にお世話になりました」

そう言うと夢美は勢い良く頭を下げた

「また気軽に来てくださいね♪お嬢様方も楽しみにしていますので」

名残惜しさはあったが夢美は門へと向かっていった――――

「さて、私も仕事に戻らなくちゃね」

咲夜はそう言うとまた音もなく消えた

「あら、もうお帰りなるんですか？」

今まで寝ていたのか口の端からヨダレを垂らした美鈴が門で迎えてくれた

「えぇ私もやらなきゃいけないことがあるので」

「そうですか、ご武運をお祈りします」

そう言うと美鈴は再び門番の仕事をするのかと思いきや寝ていた

「本日も幻想郷は平和と・・・」

そう言いながら夢美は新たな出会いと夢を求めて紅魔館を後にした

―――

「ねぇお姉さま」

「なにかしら？」

「夢美、本当にまた来てくれるかな？」

レミリアは少し考えると

「・・・えぇきっと来てくれるわ。夢美は嘘はつかないわよ」

「そうそう夢美は嘘をつかないわ！！この天才のアタイが保証するわよ！！」

「「・・・・・・」」

吸血鬼姉妹はなぜこいつが此処にいる？みたいな目をチルノに向けた

「ところでおなかすいたわ」

「なんであんたがまだいるのよ」

レミリアが理由がわからないと言わないばかりに質問した

「暇だしお腹減ったからよ」

「夢美と一緒に行かなくていいの？」

「大丈夫よ、また会えるんだから♪」

チルノは朗らかに笑いながらそう答えた

「・・・まぁいいわ、食べたら帰りなさいよ」

「ねぇねぇそれまでお話でもしとこ」

「このさいきょーのアタイの武勇伝を聞かせてあげるわ！！」

～さらば紅魔館、目指すは新天地～

紅魔館と夢美とさよなら（後書き）

さて、後半かなり空気になってしまったチルノですが
寝ていたので仕方ありませんね

さて次はどこに行くかな・・・嘘です
ある程度決まっています　いわゆる候補地です

出来れば１０月以内に最低１話は書きたいですね

最後にこの作品を読んでくださったあなたに最大限の感謝を捧げます

森と夢美と危険（前書き）

なんとか今週中に書く事ができました^^

なんかタイトルからピンチそうですが気にしないでください^^;

しかし急に寒くなりましたね・・・

そろそろ衣替えをしたほうがよさそうですね^^

前書きが完璧にいらない子になってますが

ゆっくり読んでいってください！！

森と夢美と危険

望月　夢美は人生何度目かのピンチに陥っていた
森というものは本当に厄介なもので
その場所の地理も知らずに入った日など
迷うことは必至だろ
そんな森の中、彼女はあっち行きこっち行きとフラフラと完全に迷っていた
彼女がなぜこのような状態になったかというと
時間は少し遡る――――

夢美は紅魔館への名残惜しさはまだあったが
新た場所と出会いを楽しみにしつつ
仕事のこともそれなりに頭にとどめて
霧も濃く出ている湖の畔を歩いていた

「ねぇ、チルノ」
いつもならあの元気な声がすぐ返ってくるのだが
今回ばかりは夢美の声に反応してくれる者はいなかった
「・・・・・・」
夢美はやっとのことでチルノがいないことに気づいた
「・・・まさか、紅魔館においてきちゃった？」
紅魔館を出る時は溢れ出そうな悲しさを抑えつけるので精一杯で気付かなかったが
少し落ち着いた今となってよく考えると
この現状でチルノが居ないことは非常にまずかった
この際、チルノでなくても誰かここの地理を知っている者がいればよかった
「そうだ、もう一度紅魔館に戻ってチルノを連れてきたらいいんだ」
夢美は妙案だと言わないばかりに手を手のひらにポンとすると
もう一度紅魔館に向かおうとするが
その案は早くも暗礁に乗り上げていた

「・・・どっちだっけ？」

もし此処が見通しの良い湖ならば問題なく行けただろう

だが残念ながらここは万年、霧が濃くかかった湖であった

「とりあえず歩けばどこかに着くよね？」

その質問に答えをくれる者もいなかったが

夢美は重い足取りで再び歩き始めた

夢美は当ても無くフラフラと歩き

一人でいるのがこれほど辛いものだとは思わなかった

いや、幻想郷に来たばかりの自分だったら少しは平気だっただろう

だが、幻想郷に来てまだ少しだが沢山の他人と一緒いることの幸せを知った今となっては

この状況が何倍にも辛く感じれた

そんな気持ちの中しばらく歩き続けた夢美にも少しの希望が現れた

「あ、これ道かな？」

目の前に現れたのは道であろうもの

別段綺麗に舗装されているわけではないが

道と言ってもいいものだった

「道があるって言うことはこの先に何かがあるってことかな」

この先に誰かがいるかも知れないという希望に

夢美はさっきよりもどことなく足が軽くなったような気がした――

道を目印に歩くこと数刻

湖からも離れたせいか霧はほとんど晴れ

眩しい太陽が顔を出していた

だが、夢美の目の前には

いかにも危険そうな森が広がっていた

その森は日中にもかかわらずどんよりと暗かった

さすがの夢美もこの森に入るのはためらうようだ

「この中に入っていくの・・・」

そう残念ながら今まで目印にきた道は森の中へと続いていた

どこからともなく不気味な鴉の声さえ聞こえてきそうな雰囲気だった

だが、このまま森の前で立ち往生していても時間が過ぎるだけだった

「そうよ、きっとこの道を目印に行けば大丈夫よ！！うん！！」

夢美は今にも心の底から顔を出しそうな恐怖心を声を出すことで抑えつけ

意を決して森の中へと入っていった――――――

こうして話は現在へと至る

「うぅ、いつの間に道無くなってたのかな・・・」

そう今、夢美の足元には道は続いてなかった

というのも、森に入ってしばらく歩くと怖さと警戒のあまり周りばかりを気にして

足元を見ずに進んでしまったのだ

森に入ってからずいぶんと時間が経ったのか

太陽は沈みかけ

ただでさえ薄暗い森に夜の闇が迫ろうとしていた

「もぅ・・・どっちに行けばいいのよ！！」

夢美はさっきから同じところをぐるぐる回っているような感覚だった

実際この森に目印になりそうなものはなく同じとこを回っていても

おかしくない環境だった

「夜になる前に森は出たいな・・・」

さすがに疲れはてたのか

声のトーンはいつもよりも低く元気がなかった―――

現実というものは非常で

太陽というものは一度沈みだすと辺りはあっという間に夜の闇に包

まれてしまった

「うぅ、暗いよ・・・怖いよ・・・」

昼でさえ薄暗かった森は夜になると１m先を視認するのすら困難な暗さだった

怖いが止まってしまうとさらに怖いので

クタクタの体を必死に動かし歩き続けていると

夜のせいか辺りから

霧がたちこめはじめていた

それでも一生懸命歩き続けていると

突然、夢美の視界は大きく歪みはじめた

「あれ・・・」

歩くのも辛くなり少し座って休もうと

気を抜いた瞬間

夢美の視界は暗転し、そのまま気を失ってしまった――

森と夢美と危険（後書き）

はい、タイトル通りピンチですね

どうしてこんなことになちゃったんでしょうね？^^；

あれですか、可愛い子には地獄を見せろ！！ですか？

まぁきっと大丈夫でしょう幻想郷には優しい人がたくさんいるので・・・多分

最後にこの作品を読んでくださったあなたに最大限の感謝を捧げます

彼岸と夢美と死神（前書き）

2週間ぶりくらいの更新ですかね・・・

結構間が空きましたね

あんまり前書きって書くことないですね・・・

いつも言ってるような気がします

では、ゆっくり読んでいってください！！

彼岸と夢美と死神

「うぅぅん・・・」

目を覚ますと

そこには一面に霧が広がっていた

最初はあの湖かと思ったが

どうも様子がおかしかった

なんというか

冷(ひや)〜としているような

あまり気持ちの良いものではなかった

できれば早くこの場所から立ち去りたかった

「・・・しかし、ここ何処なんだろ？」

確かにさっきまでは森の中で迷っていたはずなのに

目が覚めると勝手に移動していたって

一体どこのお伽話なんだろうか？

「誰かが運んでくれたのかな？」

普通に考えると
誰かが運んでくれたと考えるのが一番であるが
その運んでくれた人物の影すら見つからなかった
「う～ん・・・どうしよ？」
この場所に誰かが来るまでとどまっていてもいいのだが
さっきから一向に誰かが来る気配などないのだ
「とりあえず・・・あっちに行こうかな」
根拠も自信もないのだが
もっと根源的な部分であっちにいけと言われているような気がしたのだ
しばらく歩くと
先程までの土の地面はなくなり
地面には川などでよく見る
丸っこい石でたくさんになった
霧も段々晴れてきたのか

見通しも少しはマシになった
ぼんやりとだがどうもこの先には川みたいなものがあるようだ
「あそこにいけばいいのかな？」
体は目の前の川らしきものを目指しているが
頭の中では逆にあそこにいってはダメだと警鐘を鳴らしていた
だがそんな意識など関係ないのか
体は勝手にズンズンと進んでいく
次第に意識もぼんやりとしてきた
さっきまでは別のことを考えていたような気もするが
そんなことなど最早どうでも良くなっていた
そうすると次第に川がはっきりと見えてきた
まるで海のように広い川だと思った
川の岸まで着くと
私は躊躇なく
川の中に歩を進ませた

体どころか魂も凍りそうな冷たさだった
私がそんな冷たさなど無視してさら進もうとしたとき
「ちょっと！！待ったぁぁぁぁ」
声のする方に顔を向けると
誰かがすごい速さで走ってきた
その速さのまま
おもいっきりタックルを食らったせいで
おもいっきり後ろにこけ
丸っこい石に頭を強打したが
「・・・痛くない」
そう
全く痛くないのだ
タックルを受けた所どころか
石に打ち付けた頭もすらも痛くないのだ
「ほら、立てるかい？」

ポカーンとしていた夢美に向かって
目の前の人物は手を差し伸べてきた
夢美はしっかりとその手を掴むと立ち上がった
「しっかし、あぶなかったね～」
目の前の赤い髪をした女性は一人でうんうんと頷いていた
「あの・・・」
「ん・・・なんだい？」
目の前の女性にはさっき突っ込んできた時の真剣な顔は消え
どこか楽天的で頼りなさそうな顔をしていた
「ここ何処何ですか？」
目の前の女性は夢美が何をいってるのか理解出来ないのか
目をパチパチと数回させると
「本当にわかってないのかい？」
「はい・・・」
「ここは彼岸だよ。死んだ者の魂が最初に来る場所さ」

今度は夢美が目の前の女性の言っている意味が分からないのか

目をパチパチと瞬きをした

「冗談はやめてくださいよ！！私が死んだって言うんですか？」

夢美は自分が死んだなんて何かの冗談だと思っていた

「こればかりは冗談じゃないよ。死神のあたいが保証するよ」

そう言うと目の前の女性はどこから取り出したのか

立派な鎌を見せた

「・・・う・・そ・・・・よ」

夢美は目の前の女性の・・・いや、死神の言っていることが信じれなかった

「それにしても・・あんた、ずいぶんと自我がはっきりしてるんだね」

目の前の死神はめずらしいものでも見るかのように夢美を見ていた

そんな彼女の言葉も耳に入らないのか

夢美はその場所に蹲ってしまった

「・・・はぁ～」

目の前の死神は大きく溜息をつくと

「相当未練があるんだね・・・
ほら、あたいがあんたの未練聞いてあげるからさ、元気だしなよ」

そう言うと死神は夢美の横に座った

「さて、まずは自己紹介といこうか、
あたいは小野塚　小町。さっきも言ったとおり死神さ」

「・・・私は・・・望月　夢美って言います・・・」

相当ショックだったのか

いつものような元気はどこにもなかった

「夢美って言うんだね。ほら元気だしなよ」

そう言いながら小町はバンバンと夢美の背中を叩くが

痛みどころか衝撃すらも夢美は感じなかった

「小野塚さんは元気ですね・・・」

「そりゃ、あたいは元気がとりえだからね♪
それと、なんかへんな感じだからさ小野塚さんって呼ぶのはやめて
小町って呼んでくれないかい？」

「・・・はい」

そう返事をしながら夢美は元気なく頷いた
そうするとまた二人の間に会話はなくなり
しばらくの間、沈黙が続いた
「・・・・・・ダァーーー！！」
いい加減この沈黙に我慢できなくなったのか
夢美の隣に座っていた小町はいきなり立ち上がって叫んだ
それでも夢美はボーと目の前に広がる広大な川を眺めていた
「いい加減元気だしなよ。クヨクヨしてたって死んだのは変わらないんだからさ」
小町は笑いながら夢美に話しかけた
「・・・自分のことじゃないからそんなこと言えるんですよ！」
小町もさすがにこの一言にはカチンときたのか
今までと違い真剣な顔をすると
「あぁそうだよ！！あたいにとったら此処に来る魂の悩みや未練なんて他人事さ！
　その気になれば無理やり船に乗せて運んでもいいのさ、それがあたいの仕事だからね」

一気にしゃべって息が切れたのか、小町は一呼吸置くと

「でも、あたいは、あんたみたいに未練がある奴にちょっとでも未練を無くしてこの川を渡ってほしいんだよ。
ちょっとでも心を軽くしてあの世に逝って欲しいんだ。
それがそいつのためでもあるんだからさ。
だからさ最期くらい誰かに本音を言ってもいいんじゃないかい？」

小町は言いたいことをすべて言ったのか

再び夢美の横に座った

「・・・これが未練というのかわからないけど、
ただ・・・ただ・・・もっと生きたかった・・・」

夢美はそう言うとポロポロと涙が零れ出た

「一人は寂しかった・・・とても怖かったの・・・
誰にも知られず死んだのを認めたくなかった。
私のことを誰かに知っていて欲しかった！」

夢美はそう言うと我慢の限界がきたのか目から堰を切ったように涙があふれ出た

「一人が辛かったんだね、大丈夫、今は、あたいが一緒にいてあげるさ」

そう言うと小町は夢美を優しく抱いた

夢美の目からは次々と涙が湧き出してきた

さっきまで悲しく仕方なかったが
今は少しうれしくもあった
最期の最後で私は一人じゃなかった
こうやって慰めてくれる人がいた

しばらく夢美は小町の腕の中で泣き続けた――

「落ち着いたかい？」
「・・・はい」

そう言う夢美の目は赤く腫れあがっていた

「さて、じゃあそろそろ逝こうか。あたいもこれが仕事だからね」

そう言うと小町は鎌を持って立ち上がった

「小町、そろそろいいですか？」

小町が行こうとすると後ろから誰かが声をかけてきた

「今は少し忙しいので後でおｎ―」

小町が後ろを振り向くと

そこにはなんともちまっこい人が一人立っていた

「わわわ、四季様！！一体いつからそこにいたんですか！？」

驚いた様子で小町が上司に聞くと

「あなたが未練がどうのこうの言ってる辺りですかね」

映姫は少し考えながらそう言うと

「それってほとんどじゃないですか！！

なんでもっと早く声をかけてくれなかったんですか！？」

小町は少し照れているのか顔を赤くして聞くと

「あなたがしっかり仕事をしているか見るためです」

映姫は真面目な顔をして答えると

「仕事は一応はちゃんとやっているようですね」

「そうですよ。また今から仕事がありますので行ってきますね」

小町はそう言うと再び舟のほうに行こうとした

「小町、その仕事ですが行かなくても大丈夫そうですよ」

そう言うと映姫は夢美の方を見た

「安心してください夢美さん、あなたはまだ死んでいません。今までただ生死の境を彷徨っていて肉体から魂が抜けていただけです。」

そう言うと夢美に笑いかけた

「え、そんなはずｈ――」

「あなたは魂はもうすぐで元の肉体に戻るでしょう。その前に一つ言っておきます。あなたのことを大切に思ってくれる者がいる限り、あなたはその者たちに感謝し続けなさい。そして他人を信じてあげることがあなたに積める善行です」

映姫はそう言うと再び夢美へと笑いかけた

「え、そのどういう事・・・？」

夢美はまだ理解出来ないのか首を傾げていると

「簡単に言うとあんたはまだ生きられるってことさ。あんたの願いは通じたんだよ」

「え、本当！？」

夢美はさっきまであれだけ泣いてたのが嘘のように明るい顔になった

「あぁ死神と閻魔が保障するさ」

話をしているうちに夢美の姿もだいぶ薄くなってきていた

「さて、お別れの時間だね。今度会うときは勝手に一人で川を渡らないように気をつけるんだよ」

「今度来たときは是非お話をしましょう」

「小町さん、四季さん、本当にありがとうございました」

夢美は頭をさげると同時にその姿は完璧に彼岸から消えた――――

「・・・帰りましたね。では、小町、仕事に戻りましょう」

そう言うと映姫は本来自分のいるべきところに戻ろうとする

「あの、四季様」

小町はどこか歯切れが悪そうに聞くと

「なんですか？」

「最初見たときは確かにあの魂は限りなく死んでいたのですが。
なんで今になっていきなり黄泉帰ったのでしょうか？」

「さぁ？あの子の願いが天にでも届いたんじゃないでしょうか？」

四季映姫はどこか含みのある笑いを浮かべると再び戻っていった

「・・・あ、そういう事か・・・四季様も人が悪い」

納得したのか

鼻歌を歌いながら小町も仕事と昼寝をしにもどった

彼岸と夢美と死神（後書き）

久しぶりに満足に書けたような気がします
自己満足って素晴らしいですね・・・気持ちがいいです

本編中に詳しく書きませんでしたが
きっと四季様の能力使えば生死を彷徨っている魂を生き返らすことぐらいはできるとおもうんですよ
完璧独自解釈ですがいいですよね？

最後にこの作品を読んでくださったあなたに最大限の感謝を捧げます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2188n/

東方～夢限録～

2011年10月7日20時58分発行